

深川浅景

泉鏡花作

全一章

雨霽あまあがりの梅雨空つゆぞら、曇くもつてはゐるが大分蒸たいぶむし暑あつい。

—— 日和癖ひよりぐせで、何時なんどきばら／＼と來こようも知しれな

いから、案内者あんないしやの同伴どうはんも、私わたしも、各自おの／＼かうもり蝙蝠

傘がさ……いはゆる洋傘パラソルとは名なのれないのを——

色の黒くろいのに、日ひもさ／＼ないし、誰たれに憚はぶかるともな

く、すばめて杖つゑにつき、足駄あしだで泥濘ぬかるみをこねてゐる。

……いで、戰場せんぢやうに臨のぞむ時は、雑兵ざふひやうと雖いへども陣笠ぢんがさ

をいたゞく。峰入みねいりの山伏やまぶしは貝かひを吹ふく。時節じせつがら、槍やり、

白馬しろうまといへば、モダンとかいふ女をんなでも金剛杖こんがうづゑがひと

通りとほ……人生じんせい苟いやしくも永代えいたいを渡わたつて、辰巳たつみの

風かぜに吹ふかれようといふのに、足駄あしだに蝙蝠傘かうもりがさは何事なにことだ。

何どうした事ことか、今年ことしは夏帽子なつぼうしが格安かくやすだつたから、

麥稈むぎわらだけは新あたらしいのをと／＼のへたが、さつと降ふつた

ら、さそくにふところへねぢ込こまうし、風かぜに取とられ

ては事だと・・・ちよつと意氣にはかぶれない。
「吹きますよ。ご用心。」 「心得た。」 で、
耳へがつしりとはめた、シテ、ワキ兩人。

藍なり、紺なり、萬筋どころの單衣に、少々綿入
の紹の羽織。紺と白たびで、ばしや／＼とはねを上
げながら、「それ又水たまりでどざる。」 「如
何にも沼にて候。」 と、鷺歩行に腰を捻つて行
く。・・・といふのでは、深川見物も落着く處
は大概知れてゐる。はま鍋、あをやぎの時節でな
し、鱈汁は可恐しい、せい／＼門前あたりの蕎麥屋
か、境内の團子屋で、雑煮のぬきで饅ごと正宗の爛
であらう。従つて、洲崎だの、仲町だの、諸入費の
懸かる場所へは、張ひて御案内申さないから、讀者
は安心をなすつてよい。

さて色氣抜きとなれば、何うだらう。（そばに
置いてきぬことわりや夏羽織）と古俳句にもある。
羽織をたゝんでふところへ突つ込んで、空ずねの尻
端折が、一層薩張でよからうと思つたが、女房が産
氣づいて産婆のところへかけ出すのではない。今日は

日新聞社の社用で出て来た。お勤めがらに對しても、聊か取つくるはずはあるべからずと、胸のひもだけはきちんとしてゐて……・暑いから時々だらける。……

「――旦那、どこへおいでなさるんで？ は、ちよつとこたへたよ。」

と私がいふと、同伴は蝙蝠傘のさきで爪皮を突きながら、

「――そこを眞直が福島橋で、そのさきが、お不動様ですよ、と圓タクのがいひましたね。」

今しがた、永代橋を渡つた處で、よしと扉を開けて、あの、人と車と梭を投げて織違ふ、さながら繁昌記の眞中へこぼれて出て、餘りその邊のかはりやうに、ぽかんとして立つた時であつた。

「鯛や黒鯛のびち／＼はねる、夜店の立つ、……
魚市の處は？」 「あの、火の見の下、黒江町……」
と同伴が指さしをする、その火の見が、下へ往來を泳がせて、すつと開いて、遠くな

るやうに見えるまで、人あしは流れて、橋袂が廣い。

私は、實は震災のあと、永代橋を渡つたのは、その日をはじめてだつたのである。二人の風恰好又如件……で、運轉手が前途を案じてくれたのに無理はない。「いや、たゞ、ぶらつくので。」

とばかり申し合はせた如く、麥稈をゆり直して、そこで、左へ佐賀町の方へ入つたのであるが。

さて、かうたゞずむうちにも、ぐわら／＼、ぐわらとすさまじい音を立て、貨物車が道を打ちひしいで駆け通る。それあぶない、とよけるあとから、又ぐわら／＼と鳴つて来る。どしん、づん／＼づづんと響く。

焼け土がまだそれなりのもあるらしい、道悪を縫つて入ると、その癖、人通も少く、バラック建は軒まばらに、隅を取つて、妙にさみしい。

休業のはり札して、ぴたりと扉をとざした、何とか銀行の窓が、觀念の眼をふさいだやうに、灰色に

ねむつてゐるのを、近所の女房らしいのが、白いエ
プロンの薄よごれた服装で、まだ二時半前なのに、
青くあせた門柱に寄り添つて、然も夕暮らしく、曇
り空を仰ぐも、ものあはれ。・・・・・ 鷗のかはり
に鳥が飛ばう。町筋を通して透いて見える、流れの
水は皆黒い。

銀行を横にして、片側は焼け原の正面に、野中の
一軒家の如く、長方形に立つた假普請の洋館が一棟、
軒へぶつつけがきの（川）の字が大きく見えた。

夜は（川）の字に並んだその屋敷に電燈がき
ら／＼とかゞやくのであらうも知れない。あからさ
まにはいはないが、これは私の知つた廻米問屋であ
る。　　ー（大きく出たな。）　　ー　　當今三等
米、一升につき約四十三錢の値を論ずるものに、廻
米問屋の知己があらう筈はない。・・・・・ ころの
御新姐の、人形町の娘時代を預かつた、女学校の先
生を通して、ほのかに様子を知つてゐるので・・・
・・以前、私が小さな作の中に、少し家造りだけ借
用した事がある。

御存じの通り、佐賀町一廓は、殆ど軒ならび問屋
といつてもよかつた。構へも略同じやうだと聞くか
ら、昔をしのぶよすがに、その時分の家のさまを少
しいはう。いま此のバラック建の洋館に對して――
こゝに見取圖がある。―― 斷るまでもないが、
地續きだからといつて、吉良邸のでは決してない。
米價はその頃も高値だつたが、敢て夜討を掛ける繪
圖面ではないのであるが、町に向つて檜の木戸、右
に忍返しの塀、向つて本磨きの千本格子が奥深く靜
まつて、間の植込の緑の中に石燈籠に影が青い。藏
庫は河岸に揃つて、荷の揚下しは船で直ぐに取引き
が濟むから、店口はしもた屋も同じ事、煙草盆には
こりも置かぬ。……その玄關が六疊の、右へ
廻り縁の庭に、物數寄を見せて六疊と十疊、次が八
疊、續いて八疊が川へ張出しの欄干下を、茶船は浩浩
と漕ぎ、傳馬船は洋々として浮ぶ。中二階の六疊を
中にはさんで、梯子段が分れて二階が二間、八疊と
十疊――ざつとこの間取りで、なかんづくその
中二階の青すだれに、紫の總のしつとりした岐阜提
灯が淺葱にすくのに、湯上りの浴衣がうつる。姿は
婀娜でも、お妾ではないから、團扇で小間使を指固

するやうな行儀でない。「少し風過ぎる事」と、
自分でらふそくに灯を入れる。この面影が、ぬれ色
の圓鬚の艶、櫛の照とともに、柳をすべつて、紫陽
花の露とともに、流にしたゝらうといふ寸法であつ
たらしい。……

私は町のさまを見るために、この木戸を通過ぎた
事がある。前庭の植込には、きり島がほんのりと咲
き残つて、折から人通りもなしに、眞日中の忍返し
の下に、金魚賣が荷を下して、煙草を吹かして休ん
でゐた。

「それ、來ましたぞ。」
風鈴屋でも通る事か。――― 振返つた洋館をく
わさ／＼とゆるするが如く、貨物車が、然も二臺。私
をかばはうとした同伴の方が水溜に踏みこんだ。

「あ、ばしやりとヤツつけた。」

萬筋の裾を見て、苦りながら、

「しかし文句はいひますもののね、震災の時は、

このくらゐな泥水を、かぶりついて飲みましたよ。」
特に震災の事はいふまい、と約束をしたものの、
つい愚痴も出るのである。

このあたり裏道を掛けて、松村、小松、松賀町

——松賀を何も、鶴賀と横なまるには及ばない
が、町々の名もふさはしい、小揚連中の住居も揃ひ、
それ、問屋向の番頭、手代、もうそれ不心得なのが、
松村に小松を圍つて、松賀町で浄瑠璃をうならうと
いふ、藏と藏とは並んだり、中を白鼠黒鼠の俵を背
負つてちよろ／＼したのが、皆灰になつたか。御神
燈の影一つ、松葉の紋も見當らないで、箱のやうな
店頭に、煙草を賣るのも、よぼ／＼のおばあさん。

「變りましたなあ。」

「變りましたは尤もだが……この道は行留
りぢやあないのかね。」

「案内者がついてゐます。御串戯ばかり。……
・洲崎の土手へ突き當つたつて、一つ船を押せば
上總湊で、長崎、函館へ渡り放題。どんな抜け裏で
も汐が通つてゐますから、深川に行留りといふのは

ありませんや。」

「えらいよ！」

どろ／＼とした河岸へ出た。

「仙臺堀だ。」

「だから、それだから、行留りかなぞと外聞の悪い事をいふんです。——そも／＼、大川からこゝへ流れ口が、下之橋で、こゝが即ち油堀」

「あゝ、然うか。」

「間に中之橋があつて、一つ上に、上之橋を流れるのが仙臺掘川ぢやありませんか。……断つて置きますが、その川筋に松永橋、相生橋、海邊橋と段々に架つてゐます。……あゝ、家らしい家が皆取拂はれましたから、見通しに仙臺堀も見えさうです。すぐ向うに、煙だか、雲だか、灰汁のやうな空にたゞ一ヶ處、樹がこんもりと、青々して見えます。——岩崎公園。大川の方へその出で端に、お湯屋の煙突が見えます。何ういたして、あれが、霧もやの深い夜は、人をおびえさせたセメント會社の大煙突だから驚きますな。中洲と、箱崎

を向うに見て、隅田川も漫々渺々たる處だから、あなた驚いてはいけません。」

「驚きません。わかつたよ。」

「いや念のために――はゞ。も一つ上が萬年橋、即ち小名木川、千筋萬筋の鰻が勢揃をしたやうに流れてゐます。あの利根川圖志の中に、
・・えととー安政二年乙卯十月、江戸には地震の騒ぎありて心静かならず、訪來る人も稀なれば、なか／＼に暇ある心地して云々と・・・吾が本所の崩れたる家を後に見て、深川高橋の東、海邊大工町なるサイカチといふ處より小名木川に船うけて・・・。」

「また、地震かい。」

「あゝ、黙り黙り。――あの高橋を出る汽船は大變な混雑ですとさ。――この四五年浦安の釣がさかつて、沙魚がわいた、鰈が入つたと、乗出すのが、押合、へし合。朝の一番なんぞは、汽船の屋根まで、眞黒に人で埋まつて、川筋を次第に下ると、下の大宮橋、新高橋には、欄干外から、足を宙に、水の上へぶら下つて待つてゐて、それ、尋常ぢ

や乗切れないもんですから、そのまんま・・・
そつとでせうと思ひますがね、――それとも下敷は漬れても構はない、どかりとだか何うですか、汽船の屋根へ、頭をまたいで、肩を踏んで落ちて来ますつて。・・・こ奴が踏みはづして川へはまると、（浦安へ行かう、浦安へ行かう）と鳴きます。」

「串戯ぢやあない。」

「お船藏がつい近くつて、安宅丸の古跡ですからな。いや、然ういへば、遠目鏡を持った氣で・・・あれ、ご覽じろ。――と、河童の兒が同向院の墓原で悪戯をしてゐます。」

「これ、芥川さんに聞こえるよ。」

私は眞面目にたしなめた。

「口ぢやあ兩國まで飛んだやうだが、向うへ何うして渡るのさ、橋といふものがないぢやあないか。」

「ありません。」

と、きつぱりとしたもので、蝙蝠傘で、踞込んで、

「確たしかにこゝにあつたんですが、町内持ちやうないもちの分ぶんだから、まだ、架かからないでゐるんでせうな。尤もつともかうどろ／＼に埋うまつては、油堀あぶらほりとはいへませんや、鬢びん付堀つけほりも、黒髪くろびんつけです。」

「塗ぬりたくはありませんかな。」

「私わたしはもう歸かへります。」

と、麥稈むぎわらをぬいで風かぜを入いれた、頭あたまの禿はげを憤いきどほる。

「いま見棄みすてられて成なるものか、待まちたまへ、あやまるよ。しかしね、仙臺堀せんたいほりにしる、こゝにしる、残のこらず、川かはといふ名ながついてゐるのに、何なにしろひどくなつたね。大分だいぶん以前いぜんには以前いぜんだが……やつぱり今頃いまごろの時じ候こうに此この川筋かはすぢをぶらついた事ことがある。八幡様はちまんさまの裏うらの渡わたし場ばへ出でようと思おもつて、見當けんたうを取違とりちがへて、あちらこちら抜ぬけ裏うらを通とほるうちに、ざんざ降ぶりに降ふつて來きた、ところがね、格子かうしさきへ立たつて、雨宿あまやどりをして、出窓でまどから、紫むらなきぎれのてんじんに聲こゑをかかけられようといふ柄がらぢやあなし……」

「勿もちろん論ろん。」

「たゝつたな　ー　裏川岸の土藏の腰にくつ付
いて、しよんぼりと立つたつけ。晩方ぢやああつた
が、あたりがもう／＼として、向う岸も、ぼつと暗
い。折から一杯の上汐さ。．．．．．近い處に、柳
の枝はじゃぶ／＼と浸つてゐながら、渡し船は影も
ない。何も、油堀だつて、そこにづらりと並んだ藏
が　ー　中には破壁に草の生えたのも交つて　ー
油藏とも限るまいが、妙に油壺、油瓶でも積であ
るやうで、一倍陰氣で、．．．．．穴から燈心が出
さうな氣がする。手長蝦だか、足長蟲だか、びちや
／＼と川面ではねたと思ふと、岸へすれ／＼の濁つ
た中から、尖つた、黒い面をヌイと出した．．．．
」

小さな聲で、

「河、河、河童ですか。」

「はげてる癖に、いやに臆病だね　ー　何、泥
龜だつたがね、のさ／＼と岸へ上つて来ると、雨と
一所に、どつと足もとが川になつたから、泳ぐ形で
獨りでにげたつけ。夢のやうだ。このびんつけに日

が當つちやあ船蟲もはへまいよ。　　―― おんなじ
川に行當つても大した違ひだ。」

「眞個ですな、いまお話のその邊らしい。．．．
・私の友だちは泥龜のお化どころか、紺蛇目傘を
さした女郎の幽霊に逢ひました。．．．おなじ
く雨の夜で、水だか路だか分らなく成りましてね。
手をひかれたさうですが、よく川へ陥らないで、橋
へ出て助かりましたよ。」

「それが、自分だといふのだらう。．．．幽
霊でもいゝ、橋へ連出してくれないか。」

「―― 娑婆へ引返す事にいたしませうかね。」

もう一度、念入りに川端へ突き當つて、やがて出
たのが黒龜橋。　　―― こゝは阪地で自慢する

(．．．．四ツ橋を四つわたりけり) の趣があ
るのであるが、講釋と芝居で、いづれも御存じの閻
魔堂橋から、娑婆へ引返すのが三途に迷つた事にな
つて―― 面白。．．．いや、面白くない。

が、無事であつた。

―― 私たちは、蝙蝠傘を、階段に預けて、――
如何に梅雨時とはいへ・・・本来は小舟でぬ
れても、雨のなゝめな繪に成るべき土地柄に對して、
かう番ごと繻子張を持出したのでは、をかしく蝙蝠
傘の術でも使ひさうで眞に氣になる、以下この小道
具を節略する。――時に扇子使ひの手を留めて、
黙拜した、常光院の閻王は、震災後、本山長谷寺か
らの入座だと承はつた。忿怒の面相、しかし威あつ
て猛からず、大閻魔と申すより、口をくわつと、唐
辛子の利いた關羽に肖てゐる。従つて古色蒼然たる
脇立の青鬼赤鬼も、蛇矛、長槍、張飛、趙雲の概の
ない事はない。いつか四谷の堂の扉をのぞいて、眞
暗な中に閻王の眼の輝くとともに、本所の足洗屋敷
を思はせる、天井から奪衣の大婆の組違へた脚と、
眞俯向けに睨んだ逆白髪に恐怖をなした、陰惨たる
修羅の孤屋に比べると、こゝは却つて、唐土桃園の
風が吹く。まして、大王の膝がぐれに、婆は遣手の
木乃伊の如くひそんで、あまつさへ脇立の座の正面
に、赫耀として觀世音立たせ給ふ。小兒衆も、娘た
ちも、心やすく賣してよからう。但し浮氣だつたり、
おいたをすると、それは／＼本當に可恐いのである。

小父おぢさんたちは、おとなしいし、第一だいいち、品行ひんかうが方正ほうせいだから……言いつた如ごとく無事ぶじであつた。……
……はいゝとして、隣地りんち心行寺しんぎやうじの假門かりもんにかゝると、
電車でんしゃの行違ゆきちがふすきを、同伴どうはんが、をかしたことをいふ。

「えゝ、一寸ちよつと懺悔ざんげを。……」

「何なんだい、いま時分じぶん。」

「ですが、閻魔あぢらなま様の前まへでは、氣きが怯ひけたものですから。――實じつは此寺こゝの墓地ぼちに、洲崎すさきの女郎やうが埋うまつてるんです。へ、へ、へ。長ながい突通つとほしの筈かうがいで、薄化粧うすげしやうだつた時分じぶんの、えゝ、何なんにもかにも、未ひつじの刻こくの傾かたむきて、――元服げんぷくをしたんですがね。――

富川町とみかはちやううまれの深川ふかがはツ娘こだからでもありませんまいが、年ねんのあるうちから、流ながれ出だして、遂つひに泡沫うたかたの儂はかなさです。人ひとづてに聞きいたばかりですけれども、野のに、山やまに、雨あめとなり、露つゆとなり、雪ゆきや、氷こほりで、もとの水みづへ返かへつた果はては、妓夫ぎふ上あがりと世帯しよたいを持もつて、土手どてで、おでん屋やをしてゐたのが、氣きが變へんになつてなくなつたといひます。――上州じやうしゆ安中あんなかで旅藝たびげい者しやをしてゐた時とき、親知おやしらずでもらつた女をんなの子こが方便ほうべんぢやありません

んか、もう妙齡としごろで……抱かへぢやありませんが、仲なかで藝者げいしやをしてゐて、何どうにかそれが見送みおくつたんです。……心行寺しんぎやうじと確たしかいひましたつけ。おまゐりをして下さいなと、何なにかの時ときに、不思議ふしぎにめぐり合あつて、その養女やうぢよからいはれたんですが、ついそれなりに不沙汰ぶさたでゐますうちに、あの震災しんさいで……養女やうぢよの方も、まるきし行衛ゆくへが分わかりません。いづれ迷まよつてゐると思おもひますとね、閻魔堂えんまだうで、羽目はめの影かげがちりり／＼と青鬼赤鬼あをおにあかおにのまはりへうつるのが、何なんですか、ひよろ／＼と白しろい女をんなが。……

「いやな事をいふ。」

「……又地獄またぢごくの繪ゑといふと、意固地いこぢに女をんなが裸體はだかですから、氣きに成なりましたよ、ははは。……電車でんしゃ通りへ突つつ立たつて、こんなお話はなしをしたんぢあ、あはれも、不氣味ぶきみも通とほり越こして、お不動ふどう様の縁えん日にカンカンカン　ー　と小屋掛こやがけで鉦かねをたたくのも同然どうぜんですがね。」

お参まゐりをするやうに、私わたしがいふと、

「何だか陰氣に成りました。こんな時、むかし一夜具を被つた女の墓へ行くと、かぜを引きさうに思ひますから。」

ぞつとする、といふのである。なぜか、私も湿つぱく歩行き出した。

「その癖をかしいぢやありませんか。名所圖繪なぞ見ます度に、妙にあの寺が氣に成りますから、知つてゐますが、寶物に（文福茶釜）——一名（泣き茶釜）——ありは何うです。」

といつて、涙だか汗だか、帽子を取つて顔をふいた。頭の皿がはげてゐる。……思はず私が顔を見ると、同伴も苦笑ひをしたのである。

「あ、あぶない。」

笑事ではない。——工事中土瓦のもり上つた海邊橋を、小山の如く乗り來る電車は、なだれを急に、胴腹を欄干に、殆ど横倒しに傾いて、橋詰の右に立つた私たちの横面をはね飛ばしさうに、ぐわん

と行く時、運轉臺上の人の體も傾く溼の如く黒く曲つた。

二人は同時に、川岸へドンと怪し飛んだ。曲角に（危険につき注意）と札が建つてゐる。

「こつちが間抜けなんです。――番どどこれぢや案内者申し譯がありません。」

片側のまばら垣、一重に、ごしや／＼と立亂れ、或は缺け、或は傾き、或は崩れた石塔の、横鬢と思ふ處へ、胡粉で白く、さま／＼な符號がつけてある。卵塔場の移轉の準備らしい。……同伴のなじみの墓も、參つて見れば、雑とこの體であらうと思ふと、生々と白い三角を額につけて、鼠色の雲の影に、もうろうと立つてゐさうでならぬ。

――時間の都合で、今日はこちらへは御不沙汰らしい。が、この川を向うへ渡つて、大な材木堀を一つ越せば、淨心寺――靈巖寺の巨刹名山があ

る。いまは東に岩崎公園の森のほか、樹の影もな
いが、西は兩寺の下寺つきに、凡そ墓ばかりの野
である。その夥多しい石塔を、一つ一つうなづく石
の如く従へて、のほり、のほりと、巨佛、濡佛が錫
杖に肩をもたせ、蓮の笠にうつ向き、圓光に仰いで、
尾花の中に、鶏頭の上に、はた袈裟に蔦かづらを掛
けて、鉢に月影の粥を受け、掌に霧を結んで、寂然
として起ち、また跣坐なされた。

櫻、山吹、寺内の蓮の華の頃も知らない。そこで
蛙を聞き、時鳥を待つ度胸もない。暗夜は可恐く、
月夜は物すごい。．．．．知つてゐるのは、秋ま
た冬のはじめだが、二度三度、私の通つた数よりも、
さつとむら雨の数多く、雲は人よりも繁く往來した。
尾花は斜に戦ぎ、木の葉はかさなつて落ちた。その
尾花、嫁菜、水引草、雁來紅をそのまゝ、一結びし
て、處々にその木の葉を屋根に葺いた店小屋に、翁
も、媪も、ふと見れば若い娘も、あちこちに線香を
賣つてゐた。狐の豆腐屋、狸の酒屋、獺の鬮賣も、
薄日にその中を通つたのである。

．．．．．思へばそれも可懐しい．．．．．

見てすぎつ。いまの墓地の様子で考へると、

ぬれ佛の彌陀、地藏菩薩が、大きな笠に胡粉で同行

二人とかいて、足のない蟹の如く、おびたゞしい石

塔をいざなひつゝ、あの靈巖寺の、三途離苦生安養

一切衆生成正覺 大釣鐘を、灯さぬ

提灯の道しるべに、そのことも分かず、さまよはせ給

ふのであらうも存ぜぬ。

「やあ、極樂。おいらんは成佛しました。」

だしぬけに。．．．．．

「納屋に立掛けた、四分板をご覽下さい、

極．．．．．といひ掛けて、

「何だ、極選か 松割だ。．．．．．變な

事を考へてゐたものですからうつかり見違へました。

先達またへこみ。．．．．．」

次々に 特選、精選、改良、別改、また

稀．．．．．がある。

「こんな婦なら、きみはさぞ喜ぶだらう。」
さもあらばあれ、極樂の蓮の香よりのものしい、
松檜の香のふんとする河岸の木小屋に氣丈夫に成つ
た、と思ふと、つい目の前の、軒先に、眞つかな旗
がさつとなびく。

わたし
私はぎよつとした。

「は、は、は、櫂の大叉を見せて、船の楫に成る事、
檜が大割を見せて、蒲鉾屋のまな板はこれで出来ま
すなど、御傳授を申しても一向感心をなさらなかつ
たが、如何です、この旗に對して説明がなかつた日
には、海邊橋まで逃げ出すでせう。」

案内者は大得意で、

「さ、さ、私について、構はず、ずっとお進み下
さい。赤い旗には、白抜きで荷役中としてあります
—— 何と御見物、河岸から材木の上下ろしをす
る長ものを運ぶんですから往來のものに注意をしま
す。—— 出ました、それ、彼處へ、それ、向う

へ——

うしろへも。 五流六流、ひら／＼と翻
ると、河岸に、ひし／＼とつけた船から、印禰纏の
威勢の好いのが、割板丸角なんぞ引かついで、づし
／＼段々を渡つて通る。 時間だと見え、
揃つて揚荷で、それが歩板を踏み越すにつれ、おも
みを刎ね返して――川筋を横にずっと見通しの
船ばたは、汐の寄るが如く、ゆら／＼と皆ゆれ
た。 深川の水は、はじめて動いた。 . . .
. . . . 人が波を立てたやうに。――

「は、成程、は。」

案内者は惜し氣もなく頭のはげを見せて、交番で
おじぎをしてゐる。叱られたのではない。――
橋を向うへ渡らずに、冬木の道を聞いたのであつた。

「おなじやうでも、冬木だから尋ねようございま
すよ。これが、洲崎の辨天様だとちよつと聞き悪
い てつた勘定で お職掌がら、
至極眞面目ですからな。」

振り返ると、交番の前から、肩を張つて、まつ直ぐ

に指さしをして下すつた。細い曲り角に迷つたのである。橋から後戻りをした私たちは、それから二度まで道を聞いた。

この横を　ー　まつすぐにと、教はつて入つた徑は、露地とも、廂合ともつかず、横縦畝り込みになつて、二人並んでは幅つたい。しかも捜り足をするほど、草が伸びて、小さな夏野の趣がある。　ー　ー　棄り放しの空地かと思へば、竹の木戸があつたり、江一格子が見えたり、半開きの明窓が葉末をのぞいて、小さな姿見に葱が映る。　ー　ー　彼處に朝顔の簪さした結綿の緋鹿子が、などと贅澤をいつては不可ない。居れば、誰が通さう？　．．．　妙に、一つ家の構へうちを抜き足で行く氣がした。しをらしいのは、あちこちに、月見草のはら／＼と、露が風を待つ姿であつた。

こゝを通抜けつゝ見た一軒の低い屋根は、一叢高く茂つた月見草に蔽はれたが、やゝ遠ざかつて振り返ると、その一叢の葉の雲で、薄黄色な圓い月を抱くやうに見えた。

靄もやが、ぼつとして、折をりから何なんとなく雲くも低ひくく、徑こみちも一段いちだん窪くぼんで、――四し五ご十じゅう坪つぽ、――はじめて見みた――
――蘆あしが青あを々と亂みだれて生はえて、徑こみちはその端はしを縫ぬつてゐる。雨あめのなごりか、棄すて水みづか、蘆あしの根ねはびしよ／＼と濡ぬれて動うごいて、野の荊いばらの花はなが白しろく亂みだれたやうである。

時ときしも、一ひと通とほり、大おほ粒つぶなのが降ふつて來きた。蘆あしを打うつて、ぱら／＼と音おと立てて。

「ありがたい、かきつばたも、あやめもこゝには咲さきます。何なに、根ねも葉はもなくつても一いち輪りんぐらゐきつと咲さきます。案あん内ない者しやみやうがに、私わたしが咲さかせないで、は置おきません。露つゆ草くさの青あをいのも露つゆつぽくこゝに咲さきます。嫁よめ菜なの秋あき日ひ和よりも見みられますよ。――それ、何なんです。ね。……意い氣きだか、結け構こうだか、何なにしる別べつ荘さう、寮れうのあとで、これは庭にはの池いけらしうございませぬ。あの、蘆あしの根ねの處ところに、古ふる笠がさのつぶれたやうな青あを苔けの生はえた……。あれは石いし燈とう籠ろうなんですよ。」

よく見ると、菜な屑くづも亂みだれた。成なる程ほど燈とう籠ろうの笠がさらしい

のが、忽ち、三ツ四ツに裂けて蝦蟇に成つたか、と動き出したのは、蘆を分けて、ばさ／＼と、二三羽、鶏の潜りながら啄むのである。鮒や、泥鰌の生残つたのではない、蚯蚓．．．．と思ふにも、何となく棄て難い風情であつた。

しばらく視めたが、牡鶏がバツと翼を拂いて、雨脚がやゝ繁く成つたから、歩行き出すと、蘆の根を次第高に、葉がくれに、平屋のすぐ小座敷らしい丸窓がある。路が畝つて、すぐの其縁外をちか／＼と通ると、青簾が二枚．．．．捲いたのではなかつた、軒から半垂れた其の細いぬれ縁に、なよ／＼として、きり／＼としまつた浴衣のすそが見えた。白地に、藍の琴柱霞がちら／＼とする間もなく、不意に衝と出た私たちから隠れるやうに、朱鷺の伊達巻ですつと立つ時、はらりと捌いた襖淺く、柘榴の花か、と思ふのが散つて、素足が夕顔のやうに消えた。同時に、黒い淡い影が、すだれ越にさつと映した、黒髪が長く流れたのである。

洗髪を干かしてなどゐたらしい。．．．．そ

のすだれを漏れたのは、縁に坐つたのか、腰を掛け
たのか、心づく暇もなかつた。

「……ざくろの花、そ、そんな。あの、ち
ら／＼と褌に紅かつたのは螢の首です。又ぼつと青
く光るやうに肌に透き通つたではありません
か。……螢を染めた友染ですよ。もうあのく
らゐ色が白いと、影ばかり、螢の羽の黒いのなんざ、
目が眩んで見えやしません。すごい、何うもすご
い。……特選、精選、別改、改良、稀――
です。木場中を背負つて立て。極選、極樂、有難
い。いや魔界です、すごい。」

といふ、案内者の横面へ、出崎の巖をきざんだや
うな、徑へ出張つた石段から、馬の顔が又ツと出た、
大きな洋犬だ。長喙能縮――。パン／＼と厚皮
な鼻が、鼻へぶつかつたから、

「ワツ。」

といつた。――石垣から蟒が出たと思つたさ
うである。

犬嫌ひな事に掛けては、殆ど病的で、一つはそれがために連立つてもらつた、浪人の剣客がその狼狽へかただから、膽を冷やしてにげた。

またまたー再び吃驚したのは三角をさかさな顔が、正面に蟠踞したのである。こま狗の焼けたのらしい。が、角の折れた牛、鼻の碎けた猪、はたスフンクスの如き異形な石が、他に累々としてうづたかい。

早く本堂わきの裏門で、つくろつた石の段々の上の白い丘は、堀を三方に取廻した冬木の辨財天の境内であつた。

「お顔を、ご覽に成りますか。」
「いや何ういたして。……」
「こゝで拝をして参ります。」
と、同伴もいつた。

手はよく淨めたけれども、芻を上げて、よぢれた

裾は、これしかしながら天女に面すべき風體ではない。それに、蠟燭を取次いだのが、堂を守る人だと、ほかに言があつたらう。居合はせたのは、近所から一寸留守番に頼まれたといつた前垂れ掛の年配者で、「お顔を。」——これには遠慮すべきが當然の事と今も思ふ。況して、バラツクの假住居の縁に、端近だつた婦人さへ、山の手から蘆を分けた不意の侵入者に、顔を見せなかつた即時であつた。

潮時と思はれる。池の水はやゝ増したやうだが、まだ材木を波立たせるほどではない。場所によると、町が野になつた處もあるのに、覺えて一面に蘆が茂つた池の縁は、右手にその蘆の丈ばかりの小家が十うばかり數を並べて、蘆で組んだ簾も疎に、揃つて野草も生えぬ露出の背戸である。しかし、どの家も、どの家も、裏手、水口、勝手元、皆草花のたしなみがある、好みの盆栽も置き交せて。・・・失禮ながら、缺摺鉢の松葉牡丹、蜜柑箱のコスモスもありさうだが、やがて夏も半ば、秋をかけて、手桶、鹽、俎、柄杓の柄にも朝顔の蔓など掛けて、家々の後姿は、花野の帯を白露に織るであらう。

色なき家にも、草花の姿は、ひとつ／＼女である。
軒ごとに、妍き娘がありさうで、皆優しい。

横のこの家ならば正面に、鍵の手になつた、工場らしい一棟がある。――その細い切れめに、小さな木の橋を渡したやうに見て取つたのは、折から小雨して、四邊に霽の掛つたため、同伴の注意を待つまでもない。ずっと見通しの、油堀から入堀の水に、横に渡した小橋で、それと丁字形に、眞向うへ、雨を柳の絲状に受けて、縦に弓形に反つたのは、即ち、もとの渡船場に替へた、八幡宮、不動堂へ參る橋であつた。

「あなたが、泥龜に遁げたのは――然うすると、あの邊ですね。」

「さあ、あの渡船場に迷つたのだから、よくは分らないが、彼の邊だらうね。何しろ、もつと家藏が立込んで居たんだよ。」

「従つても變ですが、……友だちが、女郎の幽霊に手を曳かれたのは、工場の向裏あたりに成

るかも知れません。――然う言へば、いま見
た、……特選、稀も、ふつと消えたやうで、
何んだか怪しうございますよ。」

「御堂前で、何をいふんだ。」

「こりや何うも……景色に見惚れて、また
鳥居際に立つてみました。――あゝ八幡様の大
銀杏が、遠見の橋のむかうに、對に青々として手に
取るやうです。涼しさうにしと／＼と濡れてゐま
す。……震災に焼けたんですが、神田の明神
様でも、何所でも、銀杏は偉うございますな。
しかし苦勞をしましたね、彼所へ行つたら、敬意を
表して挨拶をしませうよ。石碑がないと、くつつけ
て夫婦に見たいんですが、あの眞中の横綱が邪
魔ですな。」

「馬鹿な事を――相撲鼻負が聞くと撲るから
およし。おや、馬が通る。……」

橋の上を、ぬほりとして大きな馬が、大八車を曳
きながら。――遠くで且音がしないから、橋を

行くのが一本の角木に乗つて、宛如、空を乗るやうである。

ハツと思ふほど、馬の腹とすれ／＼に、鞍から、
這つた娘が一人。．．．．白地の浴衣に、友禪の
帯で、島田らしいのが、傘もさゝず、ひらりと顯は
れると、馬は隠れた、――何、池のへりの何の
家か、その裏口から出たのが、丁度、遠くで馬が橋
を踏むトタンに、その姿を重ねたのである。

雨を面白さうに、中の暗い工場の裏手の廂下を、
池について、白地をひら／＼と蝶の袖で傳つて行
く。．．．．その風情に和らげられて、工場の隅
に、眞赤に燃ゆる火が、凌霄花の影を水に投げた。

娘がうしろ向きになつて、やがて、工場について
曲る岸から――その奥にも堀が續いた――
高瀬船の古いのが、斜に正面を切つて、舳を蝦蟆の
如く、ゆら／＼と漕ぎ來り、半ば池の隅へ顯はれる
と、後姿のまゝで、ポンと飛んで、娘は蓮葉に、輕
く船の上へ。

そして、艦を押す船頭を見て振り向いた。父さんに甘えたか、小父さんを迎へたか、兄哥にからかつたか、それは知らない。振り向いて、うつくしく水の上で莞爾した唇は、雲に薄暗い池の中に、常夏が一輪咲いたのである。

永喜橋　　ー　　町内持ちの、いましがたの小橋と、渡船場に架けた橋と、丁字形になる處に、しばらくして私たちは又たゝずんで、冬木の池の方を振り返つたが、こちらからは、よくは見通せない。高瀬の蝦蟆の背に娘の飛び乗つたあたりは、蘆のない、たゞ稗時の盤である。

いふまでもなく、辨財天の境内から、こゝへ来るには、一町、てか／＼とした床屋にまじつて、八百屋、荒物の店が賑ひ、二階造りに長唄の三味線の聞える中を通つた。が急に一面の焼野原が左に開けて、永代あたりまで打通しかと思はれた處がある。電柱とラヂオの竹が、矢來の如く、きらりと野末を仕切るのみ。「茫漠たるものですな。」案内者にもどこだか舊の見當がつかぬ。いづれか大工場の跡だ

らうで通つて来たが、何、不思議はない、嘗て満々と鱗浪を湛へた養魚場で、業火は水を焼き、魚を煙にしたのである。原の波間を出つ入りつ。渚に飛々苦屋の状、磯家淺間な垣廂の、新しい佛壇の覗かれものあり、古蚊帳を釣放したのに毛脛が透けば、水口を蔽ひ果てぬ管簾の下に、柄杓取る手の白さも露呈だつたが、まばら垣あれば、小窓あれば、縁が見えれば・・・また然なければ、板切に棚を組み、葭簀を立てて、いひ合はせたやうに朝顔の蔓を這はせ、あづま菊、おしろいの花、おいらん草、薄刈萱はありのまゝに、桔梗も萩も植ゑてみて、中には、大きな焼木杭の空虚を苔蒸す丸木船の如く、また貝殻なりに水を汲んで、水草の花白く、ちよろ／＼と噴水を仕掛けて、思はず行人の足を留めるのがあつた。

御堂の裏、また鳥居前から、ずっと、恚うまで、草花に氣の揃つた處は、他に一寸見當らない。天女の袖の影が日にも月にも映つて、優しい露がしたゝるのであらう。

「――いま、改めて遙拝した。――家毎に親しみの意を表しつつ、更に思へば、むかしの泥龜の化異よりも、船に飛んだ娘の姿が、もう夢のやうに思はれる。……池のかくれたのにつけても。」

「なんど、もの／＼しく言ふほどの事はない。私は、水畔の左袂が、屋根船へ這込むのが見苦しいの、頭から潜るのが無意氣だのと――落ちさへしなければ可い――そんな事を論ずる江戸がりでは断じてない。が、おはぐる蜻蛉が滲へ止つたと同じ様に、冬木の娘の早術を軽々に見過されるのが聊かも足りない。」

「漕ぎつゝある船には、岸から手を掛けるのさへ、實は一種の冒険である。」

「いま、兵庫岡本の谷崎潤一郎さんが、横濱から通つて、其Rubyv活動寫眞の世話をされた事があ

場所を深川に選んだのに誘はれて、其の女
優・・・否、撮影を見に出掛けた。年の暮で、
北風の寒い日だった。八幡様の門前の一寸したカフ
イーで落合つて・・・いまでも覚えてゐる、谷
崎さんは、かきのフライを、おかはりつき、俗にこ
みで誂へた。私は腹を痛めて居た。何、名物の馬鹿
貝、蛤なら、鍋で退治て、相拮抗する勇氣はあつた
が、西洋料理の獻立に、そんなものは見當らな
い。・・・壇ごと熱爛で引掛けて、時間が来た
から、のこり約一合半を外套の衣兜に忍ばせた。洋
杖を小脇に、外套の襟をきりりと立てたのと、連立
つて、門前通りを裏へ――越中島を畝つて流
るゝ大島川筋の蓬莱橋にかゝると、夕時を見計らつ
たのだから、水は七分来た。渡つた橋詰に、寫眞の
一行の船が三艘、石垣についてゐる。久しぶりだつ
たから、私は川筋を兩方にながめて、――あゝ、
おもひ起す、さばけた風葉、おとなしい春葉などが、
血氣さかんに、霜を浴び、こがらしを衝いて、夜ふ
けては蘆の小窓にもお思ふ女に、月影すごく見送ら
れ、朝歸り遅うしては、苦で蟹を食ふ阿媽になぶら
れながら、川口までを幾かへり、小船で漕がしたも

のだつけ。彼處に、平清の裏の松が見える。・
・一畝りした處が橋詰の加賀家だらう。・
やがて渺々たる蘆原の土手になる。・
・
・

船で手を擧げたのに心著いた。――谷崎さん

はもう乗つてゐた。なぞへに下りて石垣へ立つと、
私の丈ぐらゐな下に、船の小べりが横づけになつて、
中流の方に二艘、谷崎さんはその真中に寒風に吹か
れながら颯爽として立つてゐた。申し譯をするので
はない、私は敢て友だちを差置いて女優の乗つたの
を選びはしないが、判官飛なぞ思ひも寄りぬ事、そ
の近いのに乗らうとすると、些と足がとゞき兼ね
る。・
・
・「おつかまんせえ。」赤ら顔
の船頭が遅ましい肩をむずと突出してくれたから、
ほども様子も心得ずに、いきなり抱着いた。が船が
揺れたから、肩を、這つた手が、頸筋を抱いて、も
ろに、どさりと乗しかつた。何と何うも、柱へ枕
を打ちつけて、男同士噛りついた形だから、私だつ
て馴れない事だし、先方も驚いた、その上に不意の
重量で船頭どのが胴の間へどんと尻餅をついて一汐
浴びて「此の野郎！」尤もだ、此の野郎は更め

ていふに及ばず、大島川へざんぶ、といふと運命にかゝはる、土手をひた／＼となめる淺瀬の泥へ、二人でばしやりと寝た。

「それから思ふと・・・いまの娘さんの飛乗は、人間業ぢやあないんだよ。」

「些と大袈裟ですなあ、何、あれ式の事を・・・つて、船の棟割といった處をご覧なさい。阿媽が小舷から蟹ぢやありませんが、釜を出して、斜かひに米を磨いでるわきを、あの位な娘が、袖なしの肌襦袢から、むつちりとした乳をのぞかせて、・・・それでも女氣でござんせうな、紅入模様めりんすを長めに腰へ巻いたなりで、その泥船、埃船を棹で突ツ張つてゐますから。ー 氣の毒な事は、汗ぐつしよりですがね、労働で肌がしまつて、手足のすらりとしてゐる處は、女郎花に一雨かゝつた形ですよ。」

「雨は、お詔にしと／＼と降つてゐるし、眞個にそれが、凡夫の目に見えるのかね。」

「ご串談ばかり、凡夫だから見えるんでさあね。」

「いえまだ、もつと凡夫なのは、近頃島が湧いた様に開けました、疝氣稻荷様近くの或工場へ用があつて、私の知り合が三人連れ圓タクで乗込んだのが、歸りがけに、洲崎橋の正面見當へ打突ると、・・・凡夫ですな。また、あなた、四時だといふのに、一寸見物だけで、道普請や、小屋掛でござた返して、こんがらかつてゐる中を、ブン／＼獨樂のやうにぐる／＼廻りで、その癖込む・・・疾いんです。引手茶屋か、見番か、左は？・・・右は、といふうちに、」

「豫め御案内申しましたつけ、仲の町正面の波除へ突き當つたと思召せ。」

「忽ち蒼海漫々たり。あれが房州鋸山だ、と指さすのが、府下品川だつたり何かして、地理には全く暗い連中ですが、蒸風呂から飛上つた同然に、それは涼しいには涼しいんですとさ。・・・偏に風を賞めるばかり、凡夫ですな。巻煙草をふかす外に所在がないから、やゝあつて下に待たした圓夕

クへ下りて来ると、素裸の女郎が三人。――この
友だち意地が悪くつて、西だか東だか方角は教へま
せんがね、虚空へ魔が現れた様に、簾を拂つた裏二
階の窓際へ立並ぶと、腕も肩も、胸も腹も、くな／
＼と緋の切を巻いた、乳房の眉間尺といった形で揉
み合つて、まだそれだけなら、何、女郎だつて涼み
ます、不思議はありませんがね。招いたり、頬邊を
たゝいて見せたり、脇でまいたり、これがまさしく、
府下と房州を見違へた凡夫の目にもあり／＼と見え
たんですつて。再び説く、天の一方に當つて、遙に
ですな。惜しいかな、方角が分りません。」

「宙に迷つてる形だね、きみが手をひかれた幽霊
なぞも、或はその連中ではないのかね。」

船で手を擧げたのに心著いた。――谷崎さん
はもう乗つてみた。なぞへに下りて石垣へ立つと、
私の丈ぐらゐな下に、船の小べりが横づけになつて、
中流の方に二艘、谷崎さんはその真中に寒風に吹か
れながら颯爽として立つてみた。申し譯をするので
はない、私は敢て友だちを差置いて女優の乗つたの

を選びはしないが、判官飛なぞ思ひも寄らぬ事、その近いのに乗らうとすると、些と足がとゞき兼ねる。……「おつかまんなせえ。」赤ら顔の船頭が遅ましい肩をむずと突出してくれたから、ほども様子も心得ずに、いきなり抱着いた。が船が揺れたから、肩を、近づいた手が、頸筋を抱いて、もろに、どさりと乗しかつた。何と何うも、柱へ枕を打ちつけて、男同士噛りついた形だから、私だつて馴れない事だし、先方も驚いた、その上に不意の重量で船頭どのが胴の間へどんと尻餅をついて一汐浴びて「此の野郎！」尤もだ、此の野郎は更めていふに及ばず、大島川へざんぶ、といふと運命にかゝはる、土手をひた／＼となめる淺瀬の泥へ、二人でばしやりと寝た。

「それから思ふと……いまの娘さんの飛乗は、人間業ぢやあないんだよ。」

「些と大袈裟ですなあ、何、あれ式の事を。……これから先、その蓬萊町、平野町の河岸へ行

つて、船の棟割といった處をご覽なさい。阿媽が小
舷から蟹ぢやありませんが、釜を出して、斜かひ
に米を磨いでるわきを、あの位な娘が、袖なしの肌
襦袢から、むつちりとした乳をのぞかせて、・・・
・・それでも女氣でござんせうな、紅入模様のめり
んすを長めに腰へ巻いたなりで、その泥船、埃船を
棹で突ツ張つてゐますから。――氣の毒な事は、
汗ぐつしよりですがね、労働で肌がしまつて、手足
のすらりとしてゐる處は、女郎花に一雨かゝつた形
ですよ。」

「雨は、お詔にしと／＼と降つてゐるし、眞個に
それが、凡夫の目に見えるのかね。」

「ご申談ばかり、凡夫だから見えるんでさあね。
――いえまだ、もつと凡夫なのは、近頃島が湧
いた様に開けました、疝氣稻荷様近くの或工場へ用
があつて、私の知り合が三人連れ圓タクで乗込んだ
のが、歸りがけに、洲崎橋の正面見當へ打突る
と、・・・凡夫ですな。また、あなた、四時だ
といふのに、一寸見物だけで、道普請や、小屋掛で

ごつた返して、こんがらかつてゐる中を、ブン／＼
獨樂のやうにぐる／＼廻りで、その癖込む・・・
疾いんです。引手茶屋か、見番か、左は？・・・
右は、といふうちに、――豫め御案内申しまし
たつけ、仲の町正面の波除へ突き當つたと思召せ。
――忽ち蒼海漫々たり。あれが房州鋸山だ、と
指さすのが、府下品川だつたり何かして、地理には
全く暗い連中ですが、蒸風呂から飛上つた同然に、
それは涼しいには涼しいんですとさ。・・・偏
に風を賞めるばかり、凡夫ですな。巻煙草をふかす
外に所在がないから、やゝあつて下に待たした圖々
クへ下りて来ると、素裸の女郎が三人――この
友だち意地が悪くつて、西だか東だか方角は教へま
せんがね、虚空へ魔が現れた様に、簾を拂つた裏二
階の窓際へ立並ぶと、腕も肩も、胸も腹も、くな／＼
と緋の切を巻いた、乳房の眉間尺といった形で揉
み合つて、まだそれだけなら、何、女郎だつて涼み
ます、不思議はありませんがね。招いたり、頬邊を
たゝいて見せたり、肱でまいたり、これがまさしく、
府下と房州を見違へた凡夫の目にもあり／＼と見え
たんですつて。再び説く、天の一方に當つて、遙に

ですな。惜しいかな、方角が分りません。」

「宙に迷つてる形だね、きみが手をひかれた幽霊
なぞも、或はその連中ではないのかね。」

こゝに軒あれば、松があり、庭あれば燈籠が差の
ぞかれ、一寸連子のすき間さへ、山の手ての雀すずめの如く、
鳥影とりかげのさすと見るのが、皆みなひら／＼と船ふねであつた。
奥深い戸毎おくぶかの帳場格子ちやうばも、早く事務所じむしょの椅子いすになつ
た。

けれども、麥稈むぎわらが通りがかりに、

「あゝ、焼け残のこつた・・・」

私は凡夫わたくしだから、横目よこめにたゞ「おなじ束髪そくはつでも
涼すずしやかだな。」ぐらゐなもの、氣きにした處ところで、
ひとへに御婦人ごふじんばかりだが、同伴つれは少々骨董氣せう／＼こつとうぎがあ
るから、怪けしからん。たゞき寄せた椅子いすの下したに突つ
込んだ、鐵てつの大火鉢おほひばちをのぞき込んで、

「十萬坪じふまんつばの坩壺るつぼの中で、西瓜すゐくわのわれたやうに焼やけ
ても、溶とけなかつたんですな。寶物はうぶつですぜ。」

この不法に……叱言もいはぬは、さすがに取り鎮めた商人の大氣であらう。

それにしても、荒れてゐる。野にさらしたものの如く、杭が穴、桁が骨に成つた橋が多い。わづかに左右を残して、眞中の渡りの深く崩れ込んだのもある。通るのに危なつかしいから、また踏み迷つた體になつて、一處は泥龜の如く穴を傳ひ、或處では、
「手を曳いてたべ……幽霊どの。」

「あら、怨めしや。」
どろ／＼どろと、二人で渡つた。

人通りさへ、稀であるのに、貨物車は、衝いて通り、駆け抜ける。澁苦い顔して乗るのは、以前は小景氣な小揚たちだつたと聞く。

たゞひとり、この間に、角乗の競勢を見た。岸に柳はないけれども、一人ずつと乗つた大角材の六間餘は、引緊つた眉の下に、その行くや葉の如し。水面を操ること、草履を突つ掛けたよりも輕うして、

横にめぐり、縦に通つて、漂々として浮いて行く。

月夜に鶴歩橋を渡るなぞ、いひ出たのも極りが悪い。かの宋の康王の舎人にして、涓彰の術を行ひ、巽州、泳郡の間に浮遊すること二百年。しかして其の泳水を鯉に乗つた琴高を羨むには當らない。わが深川の兄哥の角乗は、仙人を凌駕すること、竹の柄の鳶口約十尺と、加ふるに、さらし六尺である。

道幅もやゝ傾くばかり、山の手の二人が、さいはひ長棹によらずして、たゞ突き出された川筋は、むかしにくらべると、（大）といひたい、鐵橋と註し、電車が複線といひたしたい。大汐見橋を、八幡宮から向つて左へ、だら／＼と下りた一廓であつた。

また貨物車を曳出すでもないが、車輪、磴音の響き渡る汐見橋から、ものの半町、此處に入ると、今は壊れた工場のとを、石、葉鐵を跨いで通る状態から、以前は、芭蕉で圍つたやうな、しつとりした水の色に包まれつゝ、印祥纏で木を挽く仙人が、彼

方に一人、此方に二人、大なる材木に、恰も啄木鳥の如くにとまつて、鋸の嘴を閑に敲いてみたもので、ごしごし、ごしどし、時に鋸を入れて、カンと行る。湖心に櫓の音を聞くばかり、心耳自から清んだ、と思ふ。が、同伴の説は然うでない。この汐見橋を、廓へ出入るために架けた水郷の大門口ぐらゐな心得だから、一段低く、此處へ下りるのは、妓屋の裏階子を下りて、間夫の忍ぶ隠れ場所のやうな氣がしたさうである。

夜更けて、引け過ぎに歸る時も、酔つて、乗込む時も。

大川此方の町の、場所により、築地、日本橋の方からも永代を渡るが、兩國橋、もう新大橋となると、富岡門前の大通りによらず、裏道、横町を拾つて、入堀の河岸を縫ふ。．．．晝も静かだ。夜の寂しさ。汀の蘆は夏も冷い。葉うらに透る月影の銀色は、やがて、その蘆の細莖の霜となり、根は白骨と成つて折れる。．．．結んで角組める鬘は、解けて洗髪となり、亂れて抜け毛となり、既にして穂

とともに塵に消えるのである。

それが枯れ立ち、倒れ伏す、河岸、入江に、わけ
て寒月の光り冴えて、剃刀の刃の如くこぼるる時、
大空は遙に蘆葦雑草の八萬坪を透過つて、洲崎の海、
永代浦から、蒼波品川に連つて、皎々として凍る時
よ。霜に鳴く蟲の黒い影が、世を怨む女の瞳の如く、
蘆の折葉の節々は、卒堵婆に、浮ばない戒名を刺青
したか、と明るく映る。．．．．そのおもひ、骨
髄に徹つて、齒の根震ひ、肉戦いて、酔覺の頬を悚
然と氷で割らるゝが如く感じた．．．．と言ふの
である。

御勝手になさい。

此の案内には弱つた。――（第一、こゝを
記す時、七月二十二日の暑さと言つたら。夜へかけ
て九十六度、四十年來のレコードだといふ氣象臺の
発表であるから、借家は百度を起えたらしい。）

早く汐見橋へ駆け上らう。
来るわ、来るわ。

船。 筏。

見渡す、平久橋。時雨橋。二筋、三筋、流れを合せて、濤々たる水面を、幾艘、幾流、左右から寄せ合うて、五十傳馬船、百傳馬船、達磨、高瀬、埃船、泥船、釣船も遠く浮く。就中、筏は馳る。水は瀬を造つて、水脚を千筋の綱に、さら／＼と音するばかり、装入るゝ如く川筋を上るのである。さし上る汐は潔い。

風はひよう／＼と袂を吹いた。

私は學着でないから、此の汐は、堀割を、上へ、凡そ、どのあたりまで浄化するかわらない。

けれども、驚破洪水と言へば、深川中、波立つ湖となること、傳へて一再に留まらない。高低と汐の勢ひで、あの油堀、仙臺堀、小名木川、――且且、且見た堀は、皆満々と鮮しい水を流すであらう。冬木の池も湛へよう。

誘はれて、常夏も、夕月の雲に濡れるであらう。

「成程、汐見橋は汐見橋ですな。」
同伴が更めて感心した。廓へばかり氣を取られて、あげさげ汐のさしひきを、今はじめて知つたのかと思ふと、また然うでない。

大欄干（此にも大がつく）から、電車の透き間に、北し、東して、涼しくはあるし、汐の流れを眺めるうちに……一人來た、二人來た、見ぬ間に三人、……追羽子の唄に似て、氣の輕さうな女たち、銀杏返しのも、島田なもの、ずつと廂髻なものも、何處からともなく出て來て、おなじやうに欄干立つて、しばらく川面を見おろしては、ふいと行く。——内證でお知らせ申さうが、海から颯々と吹通すので、朱鷺、淺葱、紅を、斜に絞つて、半身を翻すこと、特に風のために描いた女の蹴出の繪のやうであつた。

が、いづれも、涼むために立ち停るのではない。凡そ汐時を見計つて、橋に近づく船乗、筏師に、目許

であひづを通はせる。成程、汐見橋の所以だ、と案内者が言ふのである。眞偽は保證する限りでない。

たゞ、涼々として大汐の上る景色は、私……
一個人としては、船頭の、下から蹴出を仰ぐ如き比ではなかつた。

が、いづれも、涼むために立ち停るのではない。凡そ汐時を見計つて、橋に近づく船乗、筏師に、目許であひづを通はせる。成程、汐見橋の所以だ、と案内者が言ふのである。眞偽は保證する限りでない。

たゞ、涼々として大汐の上る景色は、私……
一個人としては、船頭の、下から蹴出を仰ぐ如き比ではなかつた。

順は違ふが、——こゝで一寸話したい。——
これは、後に、洲崎の辨財天の鳥居前の、寛政の津浪之碑の前での事である。——打寄する浪に就いて、いま言はう。

汐見橋から、海に向つた。――大島川の入江の
角、もはや平久町何丁めに成つた。――出洲の端
に同じ津浪の碑が立つて居た。――前談、谷崎
さんと活動寫眞の一行が、船で来て、其の岸を見た
震災前には、蘆洲の中に、孤影虽然として、百年一
人行く影の如く、あの、凄く、寂しく、あはれだつ
た碑が、恰も、のつぽの石臼の如く立つて、すぐ傍
には、物干棹に洗濯ものが掛つて、象を撫づるので
はないが、私たちの石を繞るのを、片側長屋の小窓
から、場所らしい、狭な娘だの、洒落れた女房が、
袖を引合つて覗いたものであつた。――いまは
同じ所、おなじ河岸に、ポキリと犀の角の折れた如
く、淵にも成らぬ痕を残して、其の軀は影もない。

焼けた水を、目前、波の鱗形に積んだ、煉瓦を根
にして、卒堵婆が一基。――神力大光普照無際
土消險。三垢冥廣濟衆厄難。――しか／＼と記
したのが、水へ斜に立つて居る。

尤も、案内者といへども、汐見橋から水の上を飛
んだのではない。一度、富岡門前へ。・・・そ

れから仲通を越中島へ、蓬萊橋を渡ること。――
其の谷崎さんの時と殆ど同一に、嘗て川へ落ちた客
が、津浪之碑を訪ねたので、古石場、牡丹町を川づ
たひに、途中、木の段五つを數へる、人のほか車は
通じない牡丹橋を高く渡つた。―― 恚う大廻り
をしないと、汐見橋から手に取るやうでも、碑のあ
とへは至り得ないのである。此のあたり、船の長屋、
水の家、肌襦袢で乳のむつちりしたのなどは、品格
ある讀者のお聞きなさりたくない事を信じて、先を
急ぐ。―― 従つて古石場の石瓦、石炭屑などは
論じない。唯一つ牡丹町の御町内、もしあらば庄屋
に建言したい事がある。場所のいづれを問はず、一
株の牡丹を、庭なり鉢なりに植ゑて欲い。紅、白、
緋、濃艶、淡彩、其の唯一輪の花開いて、臺に金色
の町名を刻むとせよ、全町立處に樂園に化して、い
まは見えぬ、團子坂、入谷の、菊、朝顔。萩寺の萩、
を凌いで、大東京の名所と成らう。凡そ、その町の
顯はるゝは、住む人の富でない。ダイヤモンドの指
環でない、時に、一本の花である。

やがて、碑のあとに、供養の塔婆を、爲出す事も

なく弔つた。

沈んだか、焼けたか、碑の行方を訪ねようと思ふにさへ、片側のバラツクに、數多く集つたのは、最早や、女房にも娘にも、深川の人どころでない。百里帶水、對馬を隔てた隣國から入稼ぎのお客である。煙草を賣つて、ラムネ、サイダーを酌するらしい、おなじ鮮女の衣の白きが二人、箆を使い、道路に水を打つを見た・・・塔を清むるは、僧の善行である。町を掃くのは、土を愛するのである。殊勝のおん事、おん事と、心ばかり黙禮しつゝ私たちは、むかし蘆間を渡せし船板　――　鐵の平久橋を渡る。

「震災の時ではありませぬで、ついこの間、大風に折れましてな。」

同伴よ、許せ、赤ら顔で、はげたのが　――　蘆の根に寄る波の、堤に並ぶ蘆簀の茶屋から、白雪の富士の見える、こゝの昔を描いた配りものらしい　――　團扇を使ひながら、洲崎の辨財天の鳥居外

に、石の柵を緩くめぐらした、碑の前に立つた時、
ぶらりと來合はせて、六十年配が然ういつた。

此處寛政三年波あれの時、家流れ人死するもの少
からず、此の後高波の變はかり難く、溺死の難なし
といふべからず、これによりて西入船町を限り、東
吉祥寺前に至るまで、凡そ長さ二百八十間餘の處、
家居取拂ひ、空地となし置くものなり。

寛政六甲寅十二月日

―― 小作中一度載之。―― 再録。――

繰返すやうだけれども、文字は殆ど認め難い。地
に三尺窪んだやうに碑の半は埋まつた。

―― 因にいふ、芭蕉に用のある人は、六間堀方
面に行くがよい。―― 江戸の水の製造元、式亭三
馬の墓は、淨心寺中雲光院にある。

さて、時をいへば、やがて五時半であつた。夏の
日も、この梅雨空で、雨の小留んだ間も、蒸しなが

ら陰が籠つて、家居は沈み、辻は黄昏れた。

團扇持つた六十年配が、一つ頸窪の蚊を敲いて立去るあとから、同伴は、兩切の煙草を買ふといつて、弓なりの辻を、洲崎の方へ小走りする。

ぼつねんとして、あとに、水を離れた人間の棒立と、埋れた碑と相對した時であつた。

皺枯れた聲をして、

「旦那さん。」

「あ。」

思はず振向くと、ふと背後に立つて、暮方の色に紛るゝものは、あゝ何處かで見た……大びけ過ぎの遣手部屋か、否、四谷の閻魔堂か、否、前刻の閻王の膝の蔭か、否。今しがた白衣の鮮女が、道を掃いた小店の奥に、暗く目を光らして居た、鐵あみを絞つたやうに、皺の數を面に刻んで、白髪を逆に亂しつゝ、淺葱の筒袖に黒い袴はいた媪である。万ちゃんの淺草には、石の枕の一つ家がある。安達ヶ原には黒嫁がある。こゝのは僥倖に、檳榔の葉の

様な團扇を皺手に、出刃庖丁を持つてをらず、腹ご
もりの嬰兒を朧衣のまゝ搦んでもゐない。讀者は、
たゞ凄く、不氣味に、靈あり、驗あり、前世の約束
ある古巫女を想像さるればよい。なほ同一川筋を、
扇橋から本所の場末には、天井の裏、壁の中に、今
も口寄せの巫女の影が残ると聞く。

「水の音が聞こえますなう。何處となくなう。」

「……」

「旦那さん、今のほどは汐見橋の上でや、
水の上のをば、嬉しげに見てござった。……
濁り濁つた、この、なう、溝川も、堀も、入江も、
浄めるには、まだ／＼汐が足りませぬよ、足りませ
ぬによつて、なう、眞夜中に来て見なされまし。」

「一月にも、星にも、美しい、氣高い、お姫様
が、なう、勿體ない、賤の業ぢや、今時の女子の通
り、目に立たぬお姿でなう、船を浮べ、筏に乗つて、
大海の水を、さら／＼と、この上、この上に灌がつ
しやります事よ。……あゝ、有難うございます。
おまゐりをなされまし、……おゝ、お連れが
ござりましたの。……おさきへごゆるされや、

はい、はい。」

と、鳥居も潜らず、片檐の暗い處を、蜘蛛の巣のやうに――衣ものの薄さに、身の皺を、次算に、板羽目へ掛けて、奥深く境内へ消えて行く。

「やあ、お待遠様。」

――次手に轉新道とかい

ふのを、一寸……覗いて来たが……燕
にしては頭が白い。あはははは、が、髭きました、
露地口に、妓生のやうなのが三人ゐましたぜ、ふは
り／＼と白い服で。」

―― 忘れたのではない。私たちは、實はまだ汐
見橋に、その汐を見つゝ立つてゐる。――

宮岡八幡宮

成田山不動明王

境内は、土を織つて白く敷けるが如く、人まばら
にして塵を置かず。神官は嚴肅に、僧達は靜寂に、

御手洗の水は清かつた。

たゞ納手拭の黒く扱れたのが、吹添ふ風に翻つて、
ぼたんと頬を打つた。遊廓の蠱を談じて、いまだ漱
がざる腥だつたからであらう。威に恐れた事はいふ
までもない。他にも、なほ二三の地、寺社に詣でた
から、太く汚れ垢づいた奉納手拭は、その何處であ
つたかを今忘れた。和光同塵とは申せども、神境、
佛地である。――近頃は衛生上使はぬことには
なつてゐるが、單に飾りとして、甚だしく汚れた手
拭は、一體誰が預かり知るべきものであるかを伺ひ
たい。早い處は、奉納をしたものが心して。・・・
・清淨にすべきであらう。

謹んで参話した。丁ど三時半であつた。まだ晝飯
を済ましてゐない。お小やすみかた／＼立寄つたの
が・・・門前の、宮川か、いゝえ、木場の、き
ん稻か、いゝえ、鳥の、初音か、いゝえ。何處だい！
えゝ、然う大きな聲を出しては空腹にこたへる、
何處といひ立てる程の事も無い、その邊の、そば

や・・・です。あ、あ。

「入らつしやい。」

しかし、蕎麥屋の方は威勢がいい。横土間で詔へを聞くのが、前鼻緒のゆるんだ、ぺたんこ下駄で、蹠の眞黒な小婢とは撰が違ふ。筋骨屈竟な壮伎が、向顛卷、筋彫ではあるが、二の腕へ掛けて、笛、太鼓、おかめ、ひよつとこの刺青。どむ底の足袋で、トン／＼と土間を切つて、「ええお待遠う。」

懇に証文した、熱爛を鷲掴みにしながら、框へ胸を斜つかけ、腰を落して、下脱みに、刺青の腕で、ぐいと突き出す。ー といった調子だから、古畳の片隅へ、裾のよぢれたので畏まつた客の、幅の利かないこと一通りでない。

「餛飩を詔へても叱られまいかね。」

「何、あなた。品がきが貼出してある以上は、月見でも、とぢでも何でも。」

「成程。」

狭い店で。．．．つい鼻頭の框に、ぞろりとした黒の紹縮緬の羽織を、くるりと尻へ捲込むで、脹肥れさうな膏切つた股を、殆ど付根まで露出の片

胡坐、どつしりと腰を掛けた、三十七八の血氣盛り。
遊び人か、と思はれる角刈で、その癖パナマ帽を差
置いた。でつぶりとして、然も頬骨の張つたのが、
あたり芋を半分に流して、蒸籠を二枚積み、種もの
を控へて、銚子を四本並べてゐる。私たちの、藪の
暖簾を上げた時——その壮佼を相手に、聲高に
辨じてゐたのが、對手が動いたため、つと中絶えが
したので。……しばらく手酌で舐めながら、
ぎろ／＼、的のないやうに、しかしおのづから私た
ちに瞳を向ける。私はその銚子の數をよんで、・
・・羨んだのではない、酔ひの程度を計つたので
ある。成たけ背を帳場へ寄せて、窓越に、白く圓々
と肥つた女房の襷がけの手が、帳面に働くのを力に
した。怯えたから、猪口を溢すと、同伴が、それは
心得たもので、二つ折の半紙を懷中から取つて出す
段取などあり。

「やあ、……聞きなよ。おい、それからだ。
しかし忙しいな。」

私たちの誂へを一二度通すと、すぐ出前に——
ボンと絆纏を肩に投げて、恰も、八幡祭の御神輿。

(こゝのは擔ぐのではない、鳳凰の輝くばかり霞空から、舞降る處を、百人一齊に、飛び上つて受けるのだといふ) 御神輿に駈け着ける勢ひで飛び出した。その壮伎の引返したのを、待兼ねた、と又辨じかけた。

「へい、おかげ様で。・・・」

「蕎麥は手打ちで、まつたく感心に食はせるからな。」

「お住居は兜町の方だとおっしゃいますが、よく、此の邊が明るくつておいでなさいますね。」

「町内、つきあひと同じ事さ、そりやお前、女が住んでる處だからよ。あはゝはゝ。」

「えゝ、何うもお楽しみで。」

「對手が、素地で、初と來てるから、そこは却つて苦しみな。情で苦勞を求めらんだ。洒落れた處はいくらもあるのに。ーーだが、手打だから、つゆ加減がたまらねえや。」

天麩羅を、ちゆうと吸つて、

「何しろ、お前、俺が顔を見せると、白い頸首が、島田のおくれ毛で、うつむくと、もう忽ち耳朶までポツとならうツて女が、お人形さんに着せるのだ、といつて、小さな紋着を縫つてゐるんだからよ。ふびんが加はらうぢやねえか、えへッへッ。人形のきものだとよ。てめえが好い玩弄の癖にしやあがつて。」

「また、旦那、滅法界な掘出しものをなすつたもんだね。一町越せば、蛤も、蜆も、山と積んぢやありませんが、問屋にも、おろし屋にも。．．．．．おまけに素人に、そんな光つたのは見た事もありません。」

「光るつたつて硝子ぢやあねえぜ。．．．．．底に艶があつて、ほんのり霞んでゐる珠だよ。こいつを、掌でうつむけたり、仰向けたり、一といへば一が出る、五といへば五が出る。龍宮から授かつた賽ころのやうな珠だから、えへッえへッへッ。」

「あ、旦那、猪口から。」

「色香滴るゝ如し．．．分つてる。縁起がな
くつちやあ眞個にはしめえな。何うだ？ 此をみつ
けたのが、女衞でも、取揚婆でもねえ。盲目だ。
ー 盲目なんだから、深川七不思議の中だらう
ぜ。こゝらも流す事があるだらう。仲町や、洲崎ぢ
や評判の、松賀町うらに住む大坊主よ。俺が洒落に
鶴賀をかじつて、坊主、出来るから、時々慰みに稽
古に行くと思ひねえ。」

（親一人子一人で、旦那、大勢に手足は裂きたく
ない、と申しまするで、お情を遣はされ。）ー
かねて、熊井、平久、平野、新道と、俺が百人斬
を知つてるから、（特別のお情を。）ーよ
し来た、早い處を。で、どうせ、あく洗ひをするか、
湯がかないぢや使へない代ものだと思つたの
が、．．．．．まるでもつて、其處等の辨天．．
．．．

「あゝ、不可え、旦那、私がこんな柄でいつちや、
をかしいやうですがね、うっかり風説はいけません。
時々貴女のお姿が人目に見えて、然もお前さ

ん。・・・髪をお洗ひなさる事さへあるツて言ひますから。・・・や、話をして、裸體の脇の下が擦つてえ。」

「それだよ、その通り、却つて結構ぢやねえか。本所の一ツ目を見ねえな・・・盲目が見つけたのからして、もうすぐに辨天だ。俺の方でいはうと思つた。ーいつか、連をごまかす都合でな、隙潰しに開帳させて、其處等の辨天の顔を見たと思ひねえ、俺の玩弄品に、その、肖如さツたら。一寸驚いた。・・・おまけに、俺が熟と見てゐるうちに、睨がぼツと來たぜ。・・・ウ。」

石榴の花が、パツと散る。

「あ、衄血だ。」

「ウーム。」

遊び人の旦那は仰向に呻つた。夥多しい衄血である。丁ど手にした井に流れ込むのを、あわてゝ土間へ落したが、蕎麥も天麩羅も眞赤に成つた。鼻柱になほ迸つて、ぼた／＼と蒸籠にしたゝり猪口に匆ね

た血に、ぷんと、■草の臭がした。

「お冷し申して・・・」
女房は土間へ片膝を下ろした。同伴も深切に懷紙を取つて立ちかけたが、壮伎が屈竟だから、人手は要らない。肩に引掛けると、ぐな／＼と成つて、臺所口へ、薄暗い土間に行く。四角な面は、のめつたやうで眞蒼である。

私たちは、無言で顔を見合はせた。

水道の水が、ざあ／＼鳴るのを聞きながら、酒を
あまして、蕎麥屋を出た。

順はまた前後した。洲崎の辨財天に詣でたのは、
此處を出てからの事なのである。

怪しき媼の言が餘り身に沁みたから、襟も身も相
ともに緊張つて、同伴が轉新道を覗いたといふにつ
けても、時と場所がらを思つて、何も話さず、暮か
けて扉なほ深い、天女の階に禮拜した。

で、その新道を横に……小栗柳川の漕がした船は、むかしこの岸へ當つて土手へ上つた、河岸を抜けて、電車に乗つた。木場一圓、入船町を右に、舟木橋をすぎ、汐見橋を二度渡つて、町はまだ明いが、兩側は店毎軒毎に電燈の眩い門前町を通りながら、――並んでは坐れず、向ひ合つた同伴と、更に顔を見合はせたが、本通りは銀座を狭くしたのとかはりのない、千百の電燈に粉れて、その蕎麥屋かと思ふ暖簾に、血の付いた燈は見えなかつた。

門前仲町で下りたのは――晩の御馳走……
・より前に、名の蛤町、大島町かけて、魚問屋の活船に泳ぐ活きた鯛を、案内者が見せようといふのであつた。

裏道は次第に暗し、雨は降る。……場所を
どう取違へたか、浴衣の藻魚、帯の赤魚、中には出額の目張魚などに出連ふのみ。鯛、鱸どころでない。鹽鯉のにほひもしない。弱つたのは、念入に五萬分一の地圖さへ袂に心得た案内者が、路は悪くなる、暮れかゝる、活船を聞くのにあせるから、言ふこと

が、しどろもどろで、「何は、魚市は？・・・」
いや、それは知つてゐますが、問屋なんで。いえ、
買ひはしません。生きた魚を見るのでして、えゝ死
んだ魚・・・もをかしいが、ぴち／＼匆ねてる
問屋ですがね。」「――難とこの通り。匆ねる問
屋もまだ可かつた。「水をちよろ／＼と吹上げて、
しやあと落してゐる處ですがね。」「親方・・・
・・・」「――はじめ黒船橋の袂で、窓から雨を見
た、床屋の小僧に聞くと、怪げんな顔をして親方を
呼んだ、が分らない。」「――「兄さん、兄さん、
一寸聞かがね。」「二度目は蛤町二丁目の河岸で、
シヤベルで石炭を引掻いてる、職人に聞いた時は、
慚愧した。「水をちよろ／＼、しやあ？・・・
・」と眞黒な顔で問ひ返して、目を白くして、
「分らねえなあ。」「これは分るまい。・・・」
「きみ、きみ・・・ちよろ／＼さへ氣恥か
しいのに、しやあと落すだけは何とかなるまいかね。
あれを聞きたびに、私はおのづから、あとじさりを
するんだがね。」「

「卑怯ですよ。……ちよろ／＼だけぢやあ
意をなしませんし、どぶりでもなし、滔たりでもな
し、しやあ。」いふ下から……。「もし／＼
失禮ですが、ちよろ／＼、しやあ。……」
通りがかりの湯歸りの船頭らしいのに叩頭をする。

櫛巻を引詰めて、肉づきはあるが、きりゝ帯腰の
引しまつた、酒屋の女房が「問屋で小賣はしませ
んよ。」「何ういたして、それ處ぢやありません。
密と拝見がいたしたので。」「おや、ご見物。」
と、金の絲切齒でにつこりして、道普請だの、建
前だの、路地うらは、地震當時の屋根を跨ぐのと同
一で、分り悪いからと、つつかけ下駄で出て来て

「あの蕎麥屋の女房を思はせる、――
圓々した二の腕をあからさまに、電燈に白く輝かし
ながら、指さしをして、掃溜をよけて、羽目を廻つ
て、溝板を跨いで、ぐら／＼してゐるから氣をつけ
て、まだ店開きをしない、お湯屋の横を抜け
た……その突き當りまで、丁寧に教へて、
「お氣をつけなさいまし、おほ／＼。」とあだに
笑つた。どうも、辰巳はうれしい處である。

問屋は、大六、大京、小川久、佃勝、西辰、ちくせん ー ー など幾軒もある、と後に聞いた。私たちは単に酒屋の女房にをそはつた通り、溝板も踏み返さず、塚にも似て空地のあちこち蠣蛤の殻堆くー (ばいすけ) の雫を刎ねて並んだのに、磯濱つたひの思ひしつゝ、指さゝれたなりに突き當りの問屋。 . . .

店頭にも何も無い。幅廣な構内の土間を眞向うに、穴藏が暗く、水氣が立つて、突通しに川が透 ー ー あすこだ。あれだ。

のそ／＼と入つた案内者が、横手の住居へ、屈み腰で挨拶する。

「水がちよろ／＼。」
 をやつてゐるに違ひない。私は卑怯ながら、その町の眞中へ、あとじさりをしたのである。

「さ、おいでなさい、許可になりました。」
活船 ー ー 瀧箱といふのであつたかも知れない。

「――が次第に、五段に並んで、十六七杯。水柱は高く六尺に昇つて、潺々と落ちて小波を立てて溢れる。――あゝ、水柱といつて聞けばよかつた。――活船に水柱の立つ處と。――」

濡板敷のすべる足もとに近い一箱を透かすと、小魚が眞黒に瀬を造る。

「泳いでゐます、鯀ですよ。」

「鯀だぜ。」
と、十五六人、殆ど裸にして、立働く、若衆の中の、若いのがいつた。

同伴は器用で、なか／＼庖丁も持てるのに。――これを思ふと、つい、この頃の事である。私の極悪意な細君で、もと柳橋で左袂を取つたのが、最近、番町のこの近所へ世帯を持つた。お料理を知つて、洗方に疎だから、――今日は――の磐臺を、臺所口からのぞいて、

「まあ、いゝ鮎ね。」
「が、鯀である。翌朝、

「あら、活きた鯉ね。」と、いはうとして・・・
・昨日に懲りて口をつぐんで、一寸容儀を調べた、
が黒鯛。これは優しい・・・

信濃國蒲原郡産の床屋職人で、氣取つたのが、鮨
は屋臺に限る、と穴子をつまんで、「むゝこの鮓
はうめえや。」以て如何とすると、うつかり同伴
に立話をする、と、三十幾本の脚が、水柱に大揺れに
揺れて――哄と笑つた。紛れ出た小鮓が、ちよ
ろ／＼と板敷を這つてゐる。

一同は働き出した。下屋の水窓へ、折から横づけ
の船から、穴子、ぎんぼうの畚、鯉、あいなめの鮓
磐臺を、掬ふ、上げる、それ抱き込む、大鯛の澆刺
たるが、（大盤臺）から飛び上つた。

この勢ひに乗じて、今度は、・・・そ・・・
ば・・・や・・・ではない。社の高信さんの籌略によつ
て、一陣の鋭兵が懷に伏せてある。・・・敵は
選ばぬ、それ押出せ、といふと、兜を直す、同伴の
頭は黒く見える。

雨をおよぎ出した町の角も、黒江町。火の見は、
雫するばかり、水晶の塔かと濡れて光つて、夜店の
盤臺には、蟹の脚が白く土手を築き、河豚かと驚く
大鯛が反つて、蝦のぶつ／＼切が血を洗つた。

加賀家、きん稻、伊勢平と、對手を探つて、同伴
は、嘗て宮川で、優しい意気な人と手合をした覚え
があると頻にはやつて、討死をしようとしたが。

——御党下さい・・・お約束はしましたけ
れど、かう降つて来ては持ち出さないわけには行か
ない、蝙蝠傘にて候ゆるゑ、近い處の境内の初音を襲
つた。

「お任せ申す。」

「心得たり。」

こゝに至ると、——實は、二上りの音じめで賣
つた洲崎の年増と洒落れた所得を持つた同伴が、頭
巾を脱いで、芥子玉の頬被した鶉に成つた。案ずる
に、ちよろ／＼水も、くたびれを紛らした串戯らし
い。

「……姉さん、一寸相談があるが、まづ名のれ、聞きたいな。」

をかしかつたのは、大肥りに肥つた、氣の好い、深切な女中が、ふふふ、と笑つてばかり、何うしても名告らなかつた、然もありなん、あとで聞くと、……お糸さん。

で、その、肥つたお糸さんに呑込まして、何でも構はぬ、深川で育つた土地ツ子を。――

若い鮮麗なのがあらはれた。

先づは、めでたい。

うけて、杯をさしながら、いよ／＼黒くなつた鵜が、いやが上におやぢぶつて、

「姉さんや、うまれは、何處だい。」

聲の下に、かすりの、明石の白緋で、十七だといふのに、紅氣なし、薄い紫陽花色の半襟くつきりと涼しいのが、瞳をばつちりと、うけ口で、

「濱通り……」

「はま通り？……」

めいりやうかんけつ
明亮簡潔に、

はまぐりせむし
「蛤町。」

【完】